
中学生 新一と蘭の事件簿?

達樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中学生 新一と蘭の事件簿？

【コード】

N5812M

【作者名】

達樹

【あらすじ】

新一と蘭の中学生生活です。

微妙にキャラ違いなのは見逃してください

すみません(^^;)

入学式

帝丹中学校

入学式

満開の桜に心地よい陽気…今日入学式を迎える生徒が校庭でワイワイ騒いでいる。
窓からはそんな姿を眺める上級生たちがいた。

「おはよう新一！」

「…おう」

笑い合いながら会話をするこの二人も今日めでたく入学を迎える二人だった。

二人はお互いの肩を叩き合いながら笑っている。

「いつてえ!!」

今、叫んだのは工藤新一。この地域では有名なサッカー少年だ。

「そんなんでサッカー部期待の星が勤まるの？」

そんな彼の姿を見て微笑んでいるのが毛利蘭。
空手部期待の星である。

「まだ入るかわかんねーしな…」

「なんでよ!?!」

「もっといろいろ見学したいしよ」

「らーん!?!」

「園子!おはよー!?!でも新一はやっぱりサッカーしてる姿が一番
カッコいいよ!」

「!?!」

「なーんてね!」

そう新一に意味深な一言を残すと蘭は声が出た方にむかって走り出
した。

「よー新一!」

「工藤君ー！」

新一は小学生の頃から男女共に人気だった。

明るく爽やかで新一に思いを寄せる女子も少なくはなかった。

ただ、みんな蘭の存在だけは認め合っていて、それだけは絶対に叶わない！と新一と蘭を冷やかすのだった。

「よっ！優太は部活決めたか？」

「俺は野球部かな！つか新一も入ればいいのに！小学校ん頃からやっつてた俺より上手いじゃん！」

「いや、俺は素質ないしさ（笑）」

すらり、長身で坊主のこの少年は青木優太。

新一とは幼稚園からの親友だ。

「谷口は何部入るの？」

続いて近くに寄ってきている女子たちにも話しかけた。

「私は吹奏楽部！」

「あたしバレー」

「うちは卓球部かな」

新一の回りはいつものようににぎあっている。

「クラス票くばりまーす新入生のみなさんは並んでくださーい」
先輩がマイクで呼び掛けている。

「B組か、おつ優太に星川…山田に清水、しかも大関まで一緒だ他には、、、！！園子もいるぜ…！！」

(えっと…アイツは

”毛利蘭”…B組！！一緒だ！！)

新一は爽やかに微笑みながら歩き出す。

そして、胸を張って

1年B組のドアをあけた。

「おはよ！工藤、一緒！一緒！」

「おお仲山！小四の時ぶりか！？おはよー」

「新一！またよろ！」

「おい、工藤一発！」

「あはは」

比較的、小学校の頃から明るい性格だった新一は他校出身の生徒に

もすぐに友達がたくさんできていった。

一方、蘭も明るい性格でクラスの女子とみんなに親しんでいった。

ガラガラ…

ドアをあける音。

その姿をみた一度は静まりかえった。

!?

「…」

ドアの前に立っていたのは陰気で大人しそうな女子だった。うつむきながら近くにある机に座った。

「おい、あれ誰だよ。」

「ああ飛鳥口礼子。うち出身でさあめっちゃ暗くてヤバイんだよ！」

ザワザワ

一斉にクラスがざわめき始めた。

いまいち、新一と蘭は状況が理解できない。

「なあ、あの子どんな奴？」

見るに見かねた俺は近くにいる奴に聞いた。

「おい、工藤。アイツに何が何でも絶対に絡むなよ！お前の人気が落ちだぞ、そういう力を持つてるんだ、飛鳥口礼子は！」

(怪談かよ…)

新一は怪訝そうな顔をする。

「馬鹿らし…どんな奴なんだろう」

新一は誰にも気づかれないような小声で礼子を見つめた。

「おはよう、飛鳥口さん」

蘭は状況を読まず、同じ目線で礼子に話しかける。
女子は小走りで蘭に近寄り首を振る。

「おはよ！飛鳥口、」

新一も笑顔で礼子に挨拶した。

礼子は一瞬、警戒したようにみえた。
だが、蘭と新一だけは違う。

一生懸命に挨拶をかえそうとしている…

ガラガラー

「おっしや、ホームルームの時間だよおおお」

ガツシリ体型の青年の若教師が叫ぶ

……… 教室中

「なんだありゃ…んで何だよ？」

「あつ、いやこの後部活動見学行くのかな？ってさ」

「ああ…俺は最初からサッカー部仮入部かな？」

「ふーん…」

「蘭は」

「どうしよう」

「空手…だろ」

蘭は態度は少し遠慮がちに見えた。

実は蘭は女が空手なんてヤバんだと考えていた。

特に思春期に入り、新一のことがより気になっていた。

新一はもてる。

もしかしたら彼女ができちゃうかもしれない。

明日 誰かを好きになっちゃうかもしれない…

空手部みたいなより、

断然 マネージャーとかチアリーダーとか中学生にもなった男子は
そういうほうに惹かれるに決まってるんだ。

ごめんね。お母さんお父さん。来月私の誕生日に新しい空手の袴買

つてくれるように約束したのに…

「何だよ。一人で行くのが寂しいのか？」

「うん…やっぱり…私、他の部活入ろう…かな」

「…なんで？」

「えっ？」

「まあ、いろいろあるからな。見学していけば？」

「…うん。」

新一は蘭が悩んでいる事に気付いているが例え幼なじみだとしても女子中学生の悩みだ。余計な空想が浮かび、園子たちに任せようと心に決めた。

「クドーン…サッカー部いくぞ…!!」

「…おおっ！じゃあな？」

「うん…バイバイ…」

一人になった蘭は仕方なく校庭のグラウンドを歩く事にした。野球部の勇ましいかけ声がする。そんな声さえ蘭には響かなかった。

そんな蘭に見えたのは三階建ての武道場だった。

その横には周りネットで囲まれた。何やらバツティングセンターのような建物がそびえ立っていた。近寄るとカチャカチャバンバン音がする。

弓道部だ…

「あ、蘭ちゃんーん！」

声ができる方へ向くと女子が数人手を振っている。同じクラスの子だ。

「あ、みんな！」

「蘭ちゃんも弓道部？」

「ううん…たまたま通りかかって…」

「そっかあ…あたしら、弓道部入るんだ！みてあの先輩。」

蘭はその方へ目を向けた。背が高く落ち着いており、弓道の知識は全くないが綺麗な姿で弓を引いていた。パチン

矢が飛び立つと勢いよく的の真ん中に刺さった。

まるで武士のようだ。
狙った的に矢を射る。
正確にあたる。

「ハンサムだよなー！カッコいいー！まさに弓道部！」

蘭は微妙にその先輩に見とれた。

その後、その女子とは別れ、とりあえず園子がいるテニスコートに向かう事にした。

あははは

聞いたことある笑い声…

新一！サッカー部だ。

「へーお前うまいんだなあ」

「そんな事っす。」

「先輩！コイツ、小学校んころから、」

「おい井口！」

「あははは」

さすが新一！

もう先輩と溶け込んで。私は原っぱに座り、しばらくサッカー部の練習を見ることにした。

…マネージャー…か。

サッカー部のマネージャー…

でも…私 約束しちゃったんだ。昔。

新一に…

『あたし空手選手になる！』

『オレはサッカーがうまいホームズになるんだ！』

新一は叶えちゃうんだ。夢を。

それに比べ私は…全然ダメだな…。

しばらくサッカー部を見ていたが時間も少なくなってきたのでテニス部へ足を踏み入れた。

「あ、蘭！」

「園子！」

「蘭、空手部は？」

「どうしようかなー…」

「なに遠慮してるのよー」

「…だよね。」

園子は新品のラケットを振り回していた。
だがはじっここの草原で仕方なく座ることにした。

「新一君となんかあった？」

「えっ？全然！」

「ふっ動揺しすぎだっつーの。なんかあったんでしょ！？」

「じ、実は…」

蘭は正直の心情を話してみた。

「…馬鹿だね蘭は。」

「？」

園子から意外な言葉が出た。

「だってさ…そんな事で新一くん、蘭を嫌うはずないじゃない」

「えっ？」

「蘭は空手が好き？」

「うん…」

「じゃあ新一くんはサッカー好きなの？」

「えっ？好きだとおもっけど…」

「ふっ…だったら蘭が新一くんがサッカーが好きなんだって分かるように新一くんも蘭が空手が好きな事が分かってるんだよ。好きな人が好きな事に打ち込む事はその人にとっても見ている人にとってもプラスになるから。だから空手やんなさいよ」

「園子……」

「まあ、今すぐじゃなくても4月いっぱいには仮入部だからゆっくり決めなよ!？」

「うん…」

私は園子の言葉に強く励まされた。

テニスコートから出るとほとんどの部活が片付けをしていた。

あのとぎ…

『新一はサッカーしている時が一番カッコいいよ』

『オレは最初からサッカー部仮入部かな』

私があんな事言ったから

新一…最初からサッカー部仮入部だなんて…

言ったのかな…

そういえば小6の時

市の空手の大会で優勝した時も最後までおめでとっつて言ってくれたのは新一だった。

帰り道 空手の事ばかり自慢気に話しても蘭は空手まじ好きだ
なって目をそらさずにずっと聞いててくれた。

今も同じ気持ちなのかな…私ったら何でこんな事で悩んでいたんだ
ろう。

やめやめ。

そんな事を考えていると荷物をかかえた園子がやってきた。

「蘭、帰る」

「園子、わたし空手やる！」

オリエンテーション(前書き)

初の前書きです

どうでしょうか？

オリエンテーション！

何となく新一の性格変えてしまってますね…

学校生活がメインですが

その内、他のキャラクターもうまく関わらせていく予定です。

まだ連載から二日目ですが書いててウキウキしますね！

次々と妄想でこのサイトへ引きつけられます！

ではこれからもよろしく！

オリエンテーション

「B組は明日からオリエンテーションで山舎に宿泊だぁぁ」

担任の熱血漢、タカDが愉快そうにはなす。

だが生徒は

「えーっ！？」

「な、なんだっ、その反応は！！？」

「だって、A組とかC組つてもっと良いところに泊まるんだろ？なんでB組だけ山舎なんだよ」

「そっだそっだ」

ザワザワ

タカDは反応に困っていたが、すぐにいつものチャラケタ顔に戻った。

「ごほん。んで、オリエンテーションの実行委員を決めたい。希望あるか？」

ザワザワ

「まじ山舎でキャンプだつてやる気しねーよな」

優太がうちわで扇ぎながら後ろの席の新一に話しかけた。

「しねーしねー」

新一もすっかり骨が抜けた感じだ。

「わたし、やるーかな」

蘭が手を挙げた。

「ん？毛利が？まあいいんじゃないか？んじゃない？もう一人は…新一！
だな？」

「えーっ？なんで!？」

いいんじゃない？

やれやれ!!

クラスからはそんな声があがる。

「…仕方ねえ…じゃあやるか！」

「イエイイ」

クラスから盛大な拍手があがる。

「さすが工藤！」

「拍手はいらねーだろ！」

新一が顔を赤くする。

蘭も赤くなっていた。

「んじゃあ、実行委員は今から他の係り決めの進行と…放課後に俺と会議な。」

そう言うとタカDは手を組みながら椅子に座った。

新一と蘭は教卓に立った。蘭が書記、新一が進行する事になった。

「んじゃあ、今からオリエンテーションでやる事と係りをきめたいと思います。」

「イエイイ!!!」

最初はブーブー言ってたクラスメイトだが新一と蘭の手によってどんどん盛り上がってきた。

「じゃあ、まず何してクラスの親睦を深める？」

「お化け屋敷！！！」

「肝試し！！！！！」

「怪談大会！！！！！！！」

「ドッジボール！！！」

「リレー大会！！！！！」

ワイワイザワザワ

次々と出る意見を新一が蘭に伝えそれを手際よく黒板に書いていく。
ナイスコンビだ。

「じゃあ、一泊目は散策、夜は肝試し！二泊目は昼に勉強会、夜は
花火大会、三泊目は登山、怪談、四日目は選択別活動で良いか！？」

「OKOK」

ワイワイザワザワ

「んじゃあ、美化とか炊事とかグループ作って！各グループで夜飯
のメニュー考えて。ちなみに活動班は男女だから！」

みんな一度も盛り下がることなく騒ぐ。

「新一！なるーぜ！」

「蘭ちゃん！こっち！」

ワイワイ

そんな様子を見ながらタカDはとても安心してる様子だ。

「あ、飛鳥口さん！良かったらグループ同じになる？」

「えっ…いいの？毛利さん…」

「うん！いいよねっ？みんな？」

女子たちは少し驚いていたが苦笑いで許した。

「ちょっと！蘭…」

「いいじゃない！園子！」

園子もさすがに遠慮している。

「なあ、蘭。園子。」

後ろから新一と優太が来た。

「何？」

「活動一緒にやるーぜ」

まさかの誘いに蘭は嬉しかった。

「うん、もちろんなあってあげてもいいけど？」

「鈴木…」

優太が園子に話しかける。

「選択別さ、カヌーにして新一と毛利二人つきりにしねえ？」

「…ふっ…甘いわね…そんな計画最初から私は計算済みよ…!!…なんとしてもあの二人を…オホホホ」

「い、こえー」

優太は啞然とした。

「なに笑ってんだ？あいつ…」

「やあ…」

「んじゃ、俺は名簿作るから。あ……」

「どうしたの？」

「…なあ蘭…この班に飛鳥口と真田入れていいか？」

「飛鳥口さん…？真田くん？」

新一は心配そうに遠くで立ち尽くす二人を眺めた。

礼子は怖がられていて避けられている。

真田もなかなかクラスの円に入れずに立ち尽くしているようだ。

「うん、飛鳥口さん！真田くん！こっち！…」

蘭は新一の優しさによりいつそう、惹きつけられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5812m/>

中学生 新一と蘭の事件簿?

2010年10月10日05時19分発行